

先人の足跡6
—鉄は熱いうちに打て—

ルテナント・コロネル柴五郎

教育問題プロジェクトチーム

榎本 眞己 陸自71

1 まえがき

皆さんは「柴五郎」という名前を聞いたことがありますか？

きつと聞いたことのある人はいないのでは、と思います。

しかし、20世紀の初め「ルテナント・コロネル（中佐）シバゴロウ」といえば、欧米各国でも有名な日本の軍人でした。それは明治33年（1900年）6月～9月、中国で起きた義和団の乱（北清事変）の際、日本武官として各国の大使館員のみならず、逃げて来たクリスチャンの中国人をも護ったことによりです。

この功績により欧米各国から勲章の授与が相継ぎ、しかも「タイムズ」の報道とも相まってルテナント・コロネ



(蔵) 国立国会図書館

ル・シバゴロウの名は欧米で広く知られることとなったのです。

当時、イギリスは「アジアにおいてロシアの南下政策を牽制する」を外交政策とし、それを日本と共有していました。義和団の乱当時、駐清英国公使であったマクドナルドは、日本軍人と共に戦いながら柴中佐をはじめとする日本将兵の勇敢さ・規律正しさに心を大きく動かされ、その底力を認めました。そして帰国後、日本との同盟を強く推進しました。これらにより英国は従来の「光榮ある孤立」と言われていた外交姿勢を放棄し、義和団の乱からわずか2年後の明治35年（1902年）1月に日英同盟を締結しました。

明治維新からわずか30数年しかたっていない黄色人種の極東の小さな日本が「大英帝国」と初の軍事同盟を締結したのです。その影の立役者がルテナント・コロネル柴五郎だったのです。

2 義和団の乱における柴五郎の活躍

それでは、この義和団の乱において柴五郎中佐はどのような活躍をしたのかを見てみましょう。

日清戦争（1894～95年）後の清国では西太后によるクーデターが成功し、保守反動・排外の政策がとられるようになりました。おりから義和団という政治色の強い宗教結社が民衆の生

活不安や排外機運に乗じて「扶清（清を助ける）滅洋（外国を亡ぼす）」を旗印とする排外運動を起こします。

このような時、42歳の柴は明治33年（1900年）3月に清国公使館付を命ぜられ、駐在武官として着任します。一方で義和団は、同年6月に教会堂を焼き、キリスト教の宣教師を殺し、さらに北京の外国公使館を包囲して暴行を起こすようになりました。

北京にあった各国の公使館は紫禁城の周りにオーストリア（奥）、ベルギー、イタリア、フランス、イギリス、ロシア、オランダ、アメリカ、スペイン、ドイツ、日本の11カ国がありました。列国公使は清朝に国際法に基づき義和団の鎮圧を要求しますが、行われません。このため天津港（直距離で約百十数km）に停泊している英・仏・露・米・伊・日・独・墺海軍の425名（日本は士官1、水兵24名）の陸戦隊を上陸させ、5月末日から6月初めにかけて公使館自衛のため北京に派遣します。しかし更なる各国混成の援軍は途中で鉄道の線路が爆破され、電話回線も破壊され、北京から外部への連絡ができなくなります。このため援軍がいつ来るかも分からなくなりました。

そこで6月初め、各国公使館付武官は英国公使館において会議を行い、更なる援軍が来るまで、各国協力して居

留民や逃げて来た約3千名のキリスト教徒の中国人を護りつつ大使館周辺にたてこもることを相談したのです。

これから約2カ月に及ぶ籠城戦が始まります。しかも6月21日には義和団が優勢とみた清国政府は、欧米列国に宣戦布告します。このため義勇兵を含め柴五郎中佐以下約500名は、20万もの義和団を含む清国兵と戦うこととなったのです。

柴は英語・フランス語ができるのですが、当初は会議があっても自ら発言することはありませんでした。それは当時日本の地位は高くなく、背も低い東洋人の発言は、欧米人の反発を招くであろうと考えていたからです。何をしていたかという点、英国義勇兵の一人で、税務司の下級職員・シンブソンという青年が次のように記録しています。「皆が右往左往して落ち着かぬ中であつて、小柄な柴中佐は、緑や赤の点の付いた北京地図を手に、じつと動かずにいた。これはシナ語にも堪能

な柴が独自の諜報網を使って入手した敵情や味方の配置を地図上に色付けし、どのように戦うかを考えていたのだと思われま

このような柴の行動を見ていたもう一人の男がいました。それが総指揮官であった元軍人の英国公使のマクドナルドです。彼は各国の兵を指揮する権

限を柴中佐に与えます。

以降、どのような苦境にあつても冷静沈着な柴五郎の指揮と日本兵等の活躍に籠城の各国兵士は士気を鼓舞され、どの国の武官も柴五郎の指揮下に好んで入るようになり、すべての行動は柴の意見を聴取した上で行われるようになります。そして籠城すること55日目、食料も弾薬も尽き果て餓死者が出る状況となつた8月14日、ついに1万6千人（半分は日本軍）の援軍が到着し北京は開城され、義和団の乱は終息したのです。

この間の柴の行動や人柄を、当時籠城していた外国人が、日記等に書いていますので、それを見てみましょう。

まず一般居留民として籠城したアメリカ女性ポリ・C・スマスは次のように書き残しています。「柴中佐は、小柄な素晴らしい人です。彼が交民巷（北京市正陽門内の東の地域名）で現在の地位を占めるようになったのは、一に彼の知力と実行力によるものです。最初の会議では、各国公使も守備隊指揮官も、別に柴中佐の見解を求めようなどとはしませんでした。でも、今ではすべてが変わりました。柴中佐は、王府での絶え間ない激戦でつねに怪腕を振るい、偉大な指揮官であることを実証しました。だから今では、すべての国の指揮官が、柴中佐の見解

と支援を求めるようになったのです」

「北京籠城」という本をまとめたピーター・フレミングは、こう記述しています。「日本軍を指揮した柴中佐は、籠城中のどの士官よりも有能で経験も豊かであつたばかりか、誰からも好かれ、尊敬された」

イギリスの公使館付通訳書記生であつたランスロット・ジャイルズは、その日記に次のように書いています。「王府で指揮に当たつてゐるのは日本の柴中佐だ。日本兵が最も優秀であることは確かだし、ここに居る士官の中では柴中佐が最優秀である。……王府は戦略上のキー・ポジションだ。……日本兵が王府の守備に当たつてゐられることは、僕たち皆にとつて非常にラッキーなことだ。もし、これがイタリア兵やオーストリア兵だつたとしたら、王府はとつくの昔に敵の手に落ち、全滅してゐたであらう」

柴中佐の指揮に入つたイギリス人義勇兵の一人、B・シンブソンは、日記に次のように記しています。「数十人の義勇兵を補佐として持つただけの小勢の日本軍は、王府の高い壁の守備にあたつてゐた。その壁はどこまでも延々とつづき、それを守るには少なくとも5百名の兵を必要とした。しかし、日本軍は素晴らしい指揮官に恵まれていた。公使館付き武官のルテナント・

コロネル・シバである。(中略)この小男は、いつの間にか混乱を秩序へとまとめていた。彼は部下たちを組織し、さらに大勢の教民たちを召集して、前線を強化してゐた。実のところ、彼はなすべきことをすべてやつてゐた。ほくは、自分がすでにこの小男に傾倒してゐることを感じる」

イギリス公使館の書記生ジャイルズは、次のように記しています。「王府への攻撃があまりにも激しいので、夜明け前から援軍が送られた。王府で指揮をとつてゐるのは、日本の柴中佐である。(中略)日本兵が最も優秀であることは確かだし、ここにゐる士官の中では柴中佐が最優秀と見なされてゐる。日本兵の勇氣と大胆さは驚くべきものだ。わがイギリス水兵がこれにつづく。しかし日本兵がずば抜けて一番だと思ふ」

エリアノラ・メアリー・ダスタンの『ベルギー公使夫人の明治日記』には、このような記述があります。「著名な日本の将校の柴五郎陸軍中佐は、その勇氣と先見の明によつて、他の誰よりも北京を守るのに功があつたという話であつた。その当時一番大きな働きをした人間に贈るために、教皇からダイヤモンドの指輪が送られてきたが、ファヴィエ大司教はこの貴重な印を直ちに柴中佐に贈呈したのである」

3 若い時の柴五郎

軍人としての実力もさることながら、誰からも尊敬され、人を魅了する豊かな人間性、さらには英語、フランス語、シナ語等に堪能な語学力を彼はどのようにして身に付けたのでしょうか？ 柴五郎のこれまでの人生を振り返つてみましょう。

柴五郎は安政6年（1859年）、会津藩士であつた柴佐多蔵の五男として生まれました。

10歳の時（慶応4年、1968年）に戊辰戦争が始まります。

母ふじは病気で寝てゐた兄茂四郎を無理に起こし、大小を腰に手ばさませせて城中に行けと命じます。しかし幼かった五郎には親戚の未亡人宅に「松茸狩りと栗拾い」に行くよう勧め、遊びに行かせます。その翌日、官軍が城下に攻め入り戦いが始まります。母、祖母、姉、妹、兄嫁の柴家婦女5名は戦の邪魔にならないように一人残らず自刃します。

母の強い勧めは五郎を戦火から遠ざけ、柴家の存続を願つた行動だったので、このことを知つた五郎は落雷を受けたような衝撃を受け、人の慰めの言葉も耳に入らなかつたと言います。しかし五郎は他人の前では一滴の涙も流しませんでしたが、やがて一人になつた時、部屋の間隙に座り込んでひく

ひどく泣きました。

官軍との戦いに負けた会津藩は朝敵とされ、生き延びた者達には過酷な試験が待ち受けていました。元武士とその家族約1万5千名は青森県下北半島の斗南藩に移封させられたのです。五郎も斗南に移り、父・長男夫妻と共に恐山の麓に小屋を建て、開墾に乗りだします。しかし、痩せ細った土地は雑穀以外には何も収穫できません。しかも極寒の劣悪な環境下で凍死、餓死するものが次々と出、五郎も髪は抜け落ち、高熱により生死の境をふらつくこともありました。そんなある日、食卓に犬の肉がのぼりました。それは射殺された野良犬をもらい、塩で煮込んだものでした。ところが、弱っていた五郎はそれを吐き戻してしまいました。それを見た父親は「武士の子たるを忘れたか。会津の武士ども餓死して果てたるよと薩長の下郎武士に笑われるのは、のちの世までの恥辱なり」と言い、無理に食べさせたのです。

幼年期に身をもつて会津で味わった戊辰戦争の悲劇と斗南に移ってから辛酸。それらに負けなかつたのは父から教えられた武士としての矜持と、亡き母に報いるために第五郎を何とか一人前に育てようとする長兄の愛情でした。克己心が強くちよつこのことで挫折

しない彼の性格は、これらの試験を通じて磨かれました。

このような生活に転機が訪れたのは明治4年、13歳の時です。廃藩置県により斗南藩も青森県と変わり、県庁で元会津藩からも給仕を採用することとなり、五郎が採用されます。

出発の日、五郎は父へ「何か、ひとかどの修行をいたさねば、ふたたび家に戻りませぬ。父上、ご健勝にてお待ち下され」と、兄から教えられた言葉を父の前で両手をついて挨拶しました。

給仕の仕事は、奥権大参事野田豁通の家僕を務めながら行いました。この野田豁通との出会いを、五郎は次のように述べています。

「野田豁通の恩愛いくたび語りても尽くすこと能わず。熊本細川藩の出身なれば横井小楠の門下とはいえ、藩閥の外にありて、しばしば榮進の道を塞がる。しかるに後進の少年を見るに一視同仁（全てを区別することなく、平等に大切にかわいがる）、旧藩対立の情を超えて、ただ新国家建設の礎石を育つるに心魂をかたむけ、しかも導くに諫言を以てせず、常に温顔をほころばすなり」

このような野田豁通の暖かい指導もあり、五郎は水洗いや掃除等の給仕や家僕を嫌がりもせず、一生懸命に行いつつ更には仕事の合間を見つけては人

に謙虚に教えを乞います。また折からドイツの軍艦が青森港に入港するや、すぐさま艦内の見学に行きます。このように彼は座して運命を待つのでなく、自ら機会を見つけては成長しようと努めました。このような下働きを通じて、また自分を指導してくれる野田豁通に学び、差別や偏見のない謙虚な暖かい人間性を身に付けます。

14歳になった五郎は自分を更に成長させるため、給仕の職を辞し上京します。しかし上京したものの泊まるどころもなく、約5カ月間いろいろな人に保護を仰いだあげく、会津藩の元家老で、斗南藩の大参事を務めた山川大蔵（後、大山巖の夫人となる山川捨松の父、この時、米国留学中）宅に転がり込み、その後、福島県令安場保和の留守宅に書生として住み込みます。この間、自分でなんとか道を切り開こうと、近所の活字工募集に応募するも字を知らな過ぎて落第、軍馬局の蹄鉄工試験に応募するも年齢不足で失格。このような苦勞をしている折、県に辞表をたたきつけ、東京に出てきていた野田豁通から陸軍幼年学校への受験を持ちかけられます。早速、野田と山川に保証人となつてもらい、読み書きと算数の付け焼き刃の勉強をして受験します。そして十五歳の時、陸軍幼年学校に入校したのです。

当時の陸軍幼年学校の教育はフランス人教官がフランス語で行っていました。入校前にきちんとした教育を受けていない五郎は教育についていくのが大変でした。そこで1年生の夏期休暇時、フランス語教師の助手をしていた有坂成章の下宿に同居をお願いし、フランス語はもとより他の教程についても指導を受けます。このような努力にもかかわらず、休み後の課程の進捗はさらに急になったために、消灯後ひそかに便所で勉強したり、ランプの上から毛布を掛け、その中に潜り込んで勉強します。後年彼はこのことを想い出し、「よくぞ火事を起こさず、またガス中毒にもならずすみたるものかと思議に思つた」と述べています。

2年生となつても成績は末尾でしたが、がむしやりに勉学をしました。それがある日、フランス語の作文の時に教師が首席から順番に生徒を名指しして自分が作った作文を読ませました。しかし誰もが途中で着席を命ぜられるにもかかわらず、最後に自分の番になつたところ終わりまで読ませられました。そして教師は「作文はこのようにつづるべし」と言ったのです。この一言が彼の今までの劣等感を吹き飛ばし、此の日より勉学が楽しみとなり、試験のたびに成績も向上しました。

その後、陸軍士官学校を卒業した五

